

教育スタッフ PLAZA

連載

研修の理解を深める

テスト フォーミュレーション



第③回

解答の流儀① ～コミュニケーション～ としてのテスト

市進ホールディングス
コンサルティング事業研究所 所長

細谷幸裕



ほそや ゆきひろ

1996年、株式会社市進入社。現場を経て、2005年より同社教育本部教務統括室にて講師養成に携わる。2008年からは全国の教育委員会・私学での教員研修の講師を務めるようになり、現在は企業・官公庁を中心に、「社内講師養成」、「OJTトレーナーのコーチング」、「説明力強化」などの研修・コンサルティングを行っている。

前回は、テストフォーミュレーションにおける視点を変える問い合わせのコツや、問い合わせの活用方法について述べました。今回は解答の考え方について考えてていきます。

作問意図の共有

テストに向かう際に、多くの人は問い合わせに対してその答えを探しにいくと思います。知識を問われたのであれば該当する知識を答えようとしますし、根拠を問われたのであればその条件を満たす情報を抽出し構成しようとするはずです。

しかしテストフォーミュレーションでは、他者がつくった問い合わせをすぐに解こうとするのではなく、作問者の問い合わせの視点を参加者同士で共有するところからはじめます。「この問い合わせの意図はなんだろうか」「この問い合わせの本質はどこにあるのだろうか」など、いわば、「問い合わせを味わう」ところからはじめていくことで、問い合わせが広がりが出て、その後の解答のフェーズが活性化します。

例えば、「人的資本経営」というテーマで学習した後に、作問者から「この考え方をわが社に適用するにはどうすればよいか」という問い合わせが出たならば、全体の考え方と活用に焦点があたっていると考えられます。「スキルシフトの必要性のある部門はどこか」という問い合わせであれば、従業員のリスクリキングや部門の生産性などに問題意識をもっていると推察されます。

このように、他者から提示された問い合わせをいったん客観的に問い合わせることで、その問い合わせの意味が共有され、その後の解答への向き合い方や答えをつくるモチベーションにも影響が出てくると思われます。

解答へのプロセス

作問意図が共有された後、テストフォーミュレーションでは、皆で解いてみたい問い合わせを選び出し、各自で解答を出し合っていく場面を設定します。このフェーズでは、解答する側に「奇をてらわない」という点に留意してもらいます。特に、作問者が変化球のような問い合わせを投げた場合は、解答者は奇策で返したいところですが、そこは作問者の意図を汲みながら、聞

かれたことに真正面から答えることが、互いの思考を深めるうえで大切です。

例えば、先程の「この考え方をわが社に適用するにはどうすればよいか」という問い合わせであれば、「この考え方」を解答者がどのように解釈して、どういうアプローチで具体的に適用していくかを述べていくことが、真正面から答えていく一つの例になります。また「スキルシフトの必要性のある部門はどこか」という問い合わせであれば、「ない」という答えではそこでストップしてしまいます。仮に「ない」であれば、解答者が組織内のスキルシフトにどんな見解をもっていて、なぜ自分は不要だと思うのかを、作問者の意図に沿うように答えたいたいところです。

このように、作問者からの投げかけに対して、解答者がその意図を汲みながら的確に自分の答えを打ち返すさまは、対話のようにもみえます。そこには、正答や誤答といった評価以上に、互いの思考を揺さぶりあうコミュニケーションの機能をもったテストができると思っています。

解答のデザイン

このように、問われたことに的確に答えることがテストフォーミュレーションの流儀といえますが、テストといつてもその種類には、選択問題や記述問題などたくさんあります。選択問題であれば、解答方法はシンプルですが、選択肢や正誤基準の視点など、作問者の意図を汲み、共有する場面は必要です。一方で、記述問題における解答には、その解答情報に何を盛り込むかの工夫が必要になります。

聞かれたことに真正面から答えるという点は先に述べたとおりですが、例えば、作問者の解答要求が200字なのか50字なのかによって盛り込む情報や構成は変わり、難度も変わってきます。受験の世界では、今までこそ解答者の考えや主張などを盛り込む設問も増えてきましたが、まだまだ模範解答ありきの正解を求めてくることが多いため、採点基準としては解答に盛り込むワードの有無や論理構造が優先されます。

しかしテストフォーミュレーションの場合、いわゆる模範解答をもとに設問がつくられていないため、答

図表 文字数の制約による変化を考える練習問題

Aの問題の解答後、Bの問題に解答してください。

A エンゲージメントに関するあなた自身の解釈を、200字程度で述べてください。

B エンゲージメントに関するあなた自身の解釈を、50字程度で述べてください。

それぞれの解答内容の違いは何ですか？

えや答えるには解答者の考え方や価値観、個性が反映されやすくなります。この条件のもと、記述問題において解答者の考えを書くことが学びの深化を促進するわけですが、さらに、あえて字数制限を設けることで、思考が整理できるというメリットがあります。同じ問い合わせに対して「200字で解答する」か「50字で解答する」かでは、情報量や構成の違いだけでなく、解答を作成するにあたっての学びの整理の仕方も異なってきます。200字であれば、具体と抽象や対比構造を織り交ぜながら伝えたいことをいくつかの表現方法のなかから選ぶことができますが、50字であれば、その制約のなかでの表現が求められることになります。

余談ではありますが、大学入試の小論文科目において200字と50字の記述解答を求める問題があったとして、どちらの問題の難度が高いと思われますか？

解答するための素材や解答基準にもよりますが、私たちの世界では50字でまとめる問題のほうが難度が高いと考えます。テストフォーミュレーションにおいても同様で、長く書きたいところを、極力、端的に洗練させていくことで、伝えたいことが明確になっていくというメリットがあります。ワークショップでは、いったん字数制限なく解答を作成してもらい、そのうえで字数制限を設けて再度短く再構成していくようにすると、モレやダブりに自ら気づいたり、自分らしいキーワードにまとめ上げられるなど、思考の深化や整理に役立ち、さらには強化・定着にもつながります（図表）。

*

今回は、答える側の姿勢や解答をつくるうえでの学習効果について述べてきました。次回は、学びある解答を構築するうえでの視点についてお伝えします。